

## 「カイサリアでの出来事」

2016年08月22日

使徒言行録 21 章 7 節～14 節 わたしたちは、ティルスから航海を続けてプトレマイスに着き、兄弟たちに挨拶して、彼らのところで一日を過ごした。翌日そこをたってカイサリアに赴き、例の七人の一人である福音宣教師フィリポの家に行き、そこに泊まった。この人には預言をする四人の未婚の娘がいた。幾日か滞在していたとき、ユダヤからアガボという預言する者が下って来た。そして、わたしたちのところに来て、パウロの帯を取り、それで自分の手足を縛って言った。「聖霊がこうお告げになっている。『エルサレムでユダヤ人は、この帯の持ち主をこのように縛って異邦人の手に引き渡す。』」わたしたちはこれを聞き、土地の人と一緒にあって、エルサレムへは上らないようにと、パウロにしきりに頼んだ。そのとき、パウロは答えた。「泣いたり、わたしの心をくじいたり、いったいこれはどういうことですか。主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです。」パウロがわたしたちの勧めを聞き入れようとしないので、わたしたちは、「主の御心が行われますように」と言って、口をつぐんだ。

パウロたち一行はティルスを出港し、プトレマイスに着いた。この町にも同信の兄弟たちがいて、彼らに挨拶して一泊した。どの町にも、キリスト信者がいたようで、福音はいたる所で宣べ伝えられていたのである。プトレマイスからカイサリアに行った。この道行は船路であったのか、陸路を歩いたのか分からない。カイサリアから目指すエルサレムまでは、徒歩であと 100 km である。

カイサリアではフィリポの家泊まった。フィリポは、原始共有制であったエルサレム教会において、ディアスポラのユダヤ人のやもめに対する差別が起こった時、公平な分配をするために、霊と知恵に満ちた評判の良い者として選ばれた 7 人の内の一人である。食事の世話をする仕事に選ばれたフィリポであるが、優れた福音宣教師であった。エチオピアの女王カンダケの財産を管理する高官の宦官に主イエスの福音を伝え、洗礼を授けている。彼に 4 人の未婚の娘がいて、彼女たちは父親の信仰に倣い、預言者として福音宣教に奉仕していた。

パウロが幾日か、滞在していると、ユダヤからアガボという預言する人が下って来た。彼はパウロの帯を取り、それで自分の手足を縛りつけ、「聖霊がこうお告げになっている。『エルサレムでユダヤ人は、この帯の持ち主をこのように縛って異邦人の手に引き渡す。』」と言った。この仕草は、預言者エレミヤが首に轆を着け、このようにバビロン捕囚されると表現した「象徴預言」のパフォーマンスと同じである。アガボの囚われの身のパウロを表した「象徴預言」を見聞きした弟子たちは土地の人と一緒にあって、パウロにエルサレムへは上らないように熱心に頼んだ。すると、パウロは、「泣いたり、わたしの心をくじいたり、いったいこれはどういうことですか。主イエスの名のためならば、エルサレムで縛られることばかりか死ぬことさえも、わたしは覚悟しているのです」と答えた。パウロのエルサレム行きの固い決意を知った人々は、「主の御心が行われますように」と言った。主イエスがゲツセマネで、苦悩の祈りの最後、「御心に適うことが行われますように」と祈ったのと同じ言葉をもって、口をつぐまざるを得なかった。行く先々で、人々はエルサレムに行くことを反対したが、パウロの決意を覆すことはできなかった。